「飼い葉桶のイエス様」

私の実家は、福山市の田舎で、家に牛小屋があります。祖父が馬喰（ばくろう）という仕事で、牛の売買の仲介や家でも牛を飼っていました。クリスマスが近づくといろんな場所に飼い葉桶に寝かされたイエス様の人形がきれいに飾られます。それらを見るたびに「違うんだよなあ」という思いが心に浮かんできます。みなさんは本当の飼い葉桶をご存じでしょうか。

家にあったのは、直径50センチくらいの円筒形、高さは30センチくらいだったでしょうか、木製のものでした。その中にお米を収穫した後のわらを刻んで入れ、ぬかや塩を入れて、最後に水を少し入れて、かき回します。飼い葉の準備が出来る頃には、牛は口からよだれを流しながら待っています。そして、飼い葉が与えられますとおいしそうに食べ、最後には、桶の底にたまった塩水に混ざった「ぬか」を長い舌をなめ回しながら食べます。動物の唾液がこびりついているのが飼い葉桶です。イエス様の時代、飼い葉が、どんなものだったか分かりませんが、動物がエサを食べる桶であれば、そんなに違わないと思います。

他人に対する嫉妬や怒り、不安や心配など私たちの心にないでしょうか。まるで動物の唾液で汚れた飼い葉桶のようです。

イエス様はお生まれになって布にくるまれ、飼い葉を敷いた桶に寝かされます。そして、私たちに語ってくださいます。「あなたのことが大切だ。そのことを伝えに来たんですよ。」と。よいクリスマスを。

（神戸教区主教）

ディサイプルシップ④
―『分かち合い』『仕える』学び―

司祭　バルナバ　永野　拓也

聖公会で近年強調されている「ディサイプルシップ（弟子であること）」の一つの強調点は、「学ぶこと」です。そして、「学ぶこと」を強調する中で、「教えること」の意味も問われています。

例えば、「意図的に弟子となり、育てていくこと」（Intentional Disciple-ship and Disciple-Making）という文書の中では、イエス様の召きに従って、「教える」ことの重要性が語られています。ただし、ここで言われていつ「教える」ことは、イエス様への信仰を生きる「行い」や「奉仕」を伴うこととされています。

具体的な例を挙げさせていただくと、アングリカンコミュニオンには、「ミニストリー・グリッド」（信徒・聖職の成長に合わせた宣教の段階を表したもの）があります。これは、「弟子であること」において必要な「資格や能力」が段階ごとに表にされており、グリッドに基づいて教えていくことが意図されています。「資格や能力」と言われてしまうと、「弟子であること」は「選ばれた人が知識の蓄積の中でなっていく」というイメージを持ってしまうかもしれません。しかし、例えば「信徒」として求められるものを見てみると、「信仰を他者と分かち合うこと」「教会共同体を超えた人々に仕える」ことが「弟子であること」の「資質や能力」であるとされています。つまり、弟子であることは、閉ざされた空間の中でなっていくものでなく、「キリスト者として外に出ていくこと」が求められているのです（教会の内（聖）と外（俗）という考え方自体も、近年では見直されつつあります）。

神学塾運営委員会では、通信講座や研修会を企画してきました。皆さんとよき学びの時を持てたことを感謝しています。そして、その学びの延長線上にあるのは、キリスト者として信仰の旅路を歩んでいくことにあるのだと思います。願わくはその歩みが、イエス様が私たちを召いてくださっていることを、多くの人と分かち合う歩みになることを祈っていきたいと思います。

（神学塾運営委員会）